
花開くとき

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花開くとき

【Nコード】

N2121Z

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

彼と両思いだと思ってた…

でも…通り魔事件によって変わった。

彼の心はどこ？私の心はどこ？

私の心は…花。

でも…花は散ってしまった…

第一章

花…それははかないもの…。

散ってしまえば、その花は終わってしまふ。

そう、恋も同じ。

恋という花が散った時、失恋という悲しさが、私たちを襲う…

花開くとき

私の名前は宮野志保。

科学免許、医者免許を持っている、天才博士と言われている私。そんなの、ただの空論にしか過ぎない。

まあ、免許を持っているのは本当。

でも、天才なんて…この世にいない…と思う。

最近、「と思う」が多くなってきた。

しかも、天才だとか、すごいとか…。

そう、私から見て、天才、すごいが当てはまっている人がいる。

ただの憧れじゃない。

私の好きな人なのだ。

彼は、私をいつもいつも助けてくれた。

私が灰原哀だったとき、私を守ってくれた。

いつもいつも守られていた私。

だから、彼にひかれていった。

どうして？

どうして私を守るの？

期待させるようなこと…しないでほしい。

私はあなたを愛してしまった。

罪なことをしてしまった。

でも、これは、チャンスかもしれない。

もし、あなたが私のことを愛しているなら、

私と両想いならば、私は幸せになる。

だって…そうでしょう？

好きでもない奴を守る？

好きでもない奴を助ける？

私だったらそんなことしない。

でも…私は本当に罪びとである。

彼をずっと待ち続けていた、蘭さんから取ってしまふこと。

きっと私と彼は両思い。
でも…蘭さんの幸せはどこ？
蘭さんはずっと暗闇にいることになる。
彼という希望を私がとってしまったら…。

あほらしい。

そんななの、蘭さんは強いから平気よ。

彼がいなくなつて、彼女はきっといい人^{彼氏}を見つける。

そうでしょう？蘭さん。

「新一い！」

あら、蘭さん。

私の彼氏に手を出すなんて…。

「なんだあゝ蘭!!！」

あらら、どうしてこたえるのよ！

「今日、買い物に付き合ってくれる？」

「ああ、いいぜ！」

「よかつたあ！最近通り魔が多いからさ…！」

「ああ…蘭、気をつけるよ？その犯人、そつと目的ターゲットに忍び寄り、気付かれぬままナイフを女性の腹を突き刺すんだってさ。」

「しかも、女性ばかり。いやだなあ…！」

どうして？

どうして蘭さんの心配ばかり…

私の好きな人、それは工藤新一。

名探偵の工藤新一。

優しい工藤新一。

私のもの…。

彼は…私のもの。

「志保さん！」

「あら、蘭さん。」

「今日、買い物行かない？」

「行かない？って…あなた知ってるでしょ？通り魔のこと。私はそんな危険なこと…」

ちよつと待つて。

もし狙われるとすると、きっと工藤君が助けてくれるはず…！

「いいえ、行くわ！あなたが狙われたらいけないものね！」

調子よく言った私。

うふふ…

「じゃあ、放課後…！」

蘭さんの声とともに、チャイムが鳴る。

授業中はいつも寝ている彼。

私も眠い…。

あ…もう限界…。

「…ちゃん…?」

え…？
誰…？

「…ほさん！？？」

誰よ…

「…ほさん！？」

誰なのよ…あなた…！！

いやあああ…！！

「志保さん！……！」

ハッと我に帰った時、私は放課後の教室にいた。教室にいるのは私と、蘭さんと……工藤君だった。

私を待つてくれたのね……。

「蘭さん、行きましょう？」

蘭さんの手を引くとともに、工藤君に視線を向ける。

あ、こつちを見てる……。

いいえ……あれは私に見ているんじゃない……！！

蘭さんを見ていた・・・。

優しい、穏やかな笑顔で…

第二章

「蘭！蘭っ！！！！蘭っ！！！！」

「ら・・・ん・・・さん・・・」

ピーポーピーポー

「お前を逮捕する！！」

男女の大声が道路に血まみれで横たわっている女子に呼びかけている。

その女子は帝丹高校二年、毛利蘭だった。

呼びかけている女は驚きで何も言えない・・・。

男は一生懸命汗を流すまで大きな声で呼びかけた。

「誰か、付き添ってくれる人はいませんか！？」

救急車の人々が人々に呼びかけている。

蘭を救急車に乗せた。

「俺、行きます！」

「わかりました、では、乗ってください。」

新一は素早く乗ると、研究者、医者、宮野志保は救急車が発するのを見届けた。

なぜ…

蘭がこうなってしまったのか…

それは、今から32分15秒前…

ここから、志保目線で説明します…。

「えーと…これと…これと…」

蘭さんが傷のなさそうな野菜を一生懸命選んでいる。
どうやら今夜はカレーらしい。
しかも、三人分取っている…。

蘭さんと、蘭さんのお父さんということとはわかるけど…
あともう一人は誰かしら？

「新一、サラダ食べる？」

さつきから蘭さんは工藤君に質問。

私はそんな景色を見て、こう推理した。

あともう一人は…

工藤君だと…。

工藤君は嬉しそうに答えている。

きつとそう。

私という人がいるのに…。

私が悲鳴を上げた・・・
目をつぶって痛みを感じ・・・

てない・・・？

今・・・ナイフが突き刺さった音がしたはず・・・！！

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ」

犯人だって・・・笑ってるじゃない・・・！！
私・・・死んでるの？

そつとそつと目を開けた・・・。

そこにいるのは・・・黒髪で私が憎んでいた・・・

蘭さんだった・・・。

「ラ、蘭さん…!？」

「だい・・・じょうぶ？けが…ない？」

そ、そんなことより…あなたのほうが…っ!!

蘭さんのおなかから大量に血が出ていた。

「だいじょうぶ…警察…呼んだから…」

「救急車、呼んでくるわ！」

私はその場から逃げたかった。

私のせいにされる…

工藤君に文句言われる…

私が戻つてくると工藤君が蘭を抱き上げていた。

哀しそうな、憎しみのこもった顔で私を睨みつける・・・。

「く、工藤君・・・？」

「宮野…救急車は？」

「あ、あと1分ぐらいで…」

「そうか…っ蘭っ！！！！しっかりしろよ！蘭！！！！」
さっきより血が…たくさん出てる…！

「ら…ん…さん…」

どうにもならなかった。

どうにも…

救急車がくると、蘭さんはタンカに乗せられ、工藤君は付き添っていった。

私はただ…見守るしかなかった。

哀しい顔をしていことは…私にもわかった。

そのご、蘭さんを襲った通り魔は無事、逮捕された。

「蘭さん…」

そっと呟いた時、私の目から涙が出てきた…。

その時、どこからか、声が聞こえてきた。

「あのひとよ、あの人。さっきのかわいい子がかばったのよ…！お礼も言わないで…っもしかしたら、さっきのかわいい子をたてにし

たんじゃない!？」

「最低！」

「本当よね!？」

違うのに…蘭さんが勝手に…

でも…お礼も何も言っていない…。

蘭さん…っ

蘭さん…っ

ゴメンナサイ…。

そして…

ありがとう…

私は急いで米花総合病院に向かった…

第二章（後書き）

蘭…どうなるの!？

第三章（前書き）

蘭目線です！

第三章

私…どこにいるんだろう…？

真っ暗な世界…

暗黒な世界…

そんな感じがする。

真っ暗で何も見えない…！

怖い…いや…

私…何があつたんだろう？

確か…確か…

私…志保さんをかばって…かばって…

そう…通り魔に刺されちゃったんだ…

ちよつど買い物が終わったから公園に行ったら、志保さんが襲われ
そうになっていたから…なぜか、体が動いていた。

そのあとのことは覚えていない…。

かすかに新一の声が聞こえた。

一生懸命私を呼んでくれた。それだけでうれしかった…新一が私を
呼んでくれているだけでうれしいよ…。

もし…私が死んじゃったら…志保さんと幸せになってね…新一…。
そう、知ってた…志保さんは新一のことが好きだって。

きつと新一も志保さんが好き。

でも・・・私は新一がずっと好きだった・・・。

その時、志保さんが通り魔に襲われそうになっていた・・・。

志保さんが死んでしまったら、新一の幸せはどこへ行くの？

そう思ったとたん、私は志保さんを庇っていた。新一の幸せのため、

志保さんの幸せのため、そして、私の幸せのため。

新一が幸せなら・・・私も十分に幸せです・・・。

新
—
∴

ハッ・・・

聞こえた…蘭の声が聞こえた…！

俺は、蘭を助けてやることができなかった。

蘭と幼馴染の俺が…

蘭を昔から愛している俺は…守ることができなかった。

蘭を守ることができなかった。

まさにスローモーションだった。

でも、そのスローモーションに俺はついていくことができなかった。

蘭は命を張って宮野を守った。

俺は…そんなことできなかった。

どうしてだ？

探偵であるこの俺が…一人の女の子に負けるなんて…

そんなのどうでもいい！
とにかく…蘭が助かるまで…
俺は…戦い続ける…！

志保さんと幸せになってね…

え…？

蘭…？

何言っただよ…！俺は…蘭が好きなんだぞ？！

蘭…！！

まさか…

俺は急いで蘭のいる病室へ向かった。

「蘭！蘭！！」

一生懸命呼びかける。

付添いの宮野が驚いたような顔をしている。

「工藤君！何を……！！」

「蘭！！蘭っ！！！！」

「工藤君！」

宮野の声なんか俺の耳には届いていなかった。

それよりも、蘭の言葉が聞きたくて……蘭の瞳が見たくて……たまらなかつた。

あ……動いた……

蘭の指がかすかに動いたのが、おれも、宮野も分かった。

「蘭！？蘭！！！」

「……」

蘭の瞳がかすかに見えた…。

きれいなすんだ瞳が俺に見えた…。

きれいに丸く開いた瞳は…どこかわからないようなどこか、遠くを見ているような目だった。

「宮野！先生を呼んで来い！」

「ええ！！！」

宮野が走っていく。

「蘭！目が覚めたんだな！」

「……」

「蘭…？どうかしたか…？」

蘭の返事がない…。

蘭の返事が…ない…

どうかしたのか？

蘭…？

「あなたは誰…？私は…蘭っていつんですか…？」

第三章（後書き）

蘭！？どうかしたのかあああ！！？

ってオーバーな私です…！

感想待ってます！

第四章

「あなたは誰…？私は…蘭っていうんですか…？」

衝撃の言葉が、工藤君に襲いかかる。

私がそれを聞いたのが、先生を病室に急いで連れてきて、ドアを開けた瞬間だった。

「ら…ん？」

工藤君はもう失神寸前のような目で蘭さんを見つめていた。

「あの…だから…！私は…？」

蘭さんは…

記憶喪失になっていた…

なぜ…？なぜ？

どうして…！？

私をかばったことがそんなにショックだったの？

私…私がいけないの？

蘭さん…！何とか言ってよお…！！！！

「毛利さんのご両親は？」

先生が工藤君に話しかける。

でも、私が答えた。

今の彼に、どんな声をかけたって彼の耳には届きはしない。
たとえば私でも…蘭さんでない限り…

「今日、来るはずです…！」

「そうか…宮野…さん、ちょっと別室に来てください。」

「わかりました。」

蘭さんのことで、先生とよく話した。

「それで？蘭さんはどうなったの？」

「あなたも医者でしょう？わかるはずです。」

「いいから答えなさい！！蘭さんは…！どうなってしまっの…！」

「…記憶…喪失です…！」

「記憶…喪失…！」

心の中ではもしかしたらと思っていた…

でも…本当にそうとは思わなかった。

私は重い足で、工藤君を呼びに行った。

「工藤……」

工藤君と言おうとしたとき、工藤君は蘭さんを抱きしめていた。蘭さんは驚いたような顔つきで工藤君を見ていた。

見てはいけないうようなものを見てしまった。

「あ……あの……?」

「あら……やだ……工藤君?何を……」

「蘭……」

私の声が届いていない……

彼の耳には蘭さんの声しか届いていない……

「あ、あの……だから……私は誰なんですか?あなたはいつたい誰なんですか?」

「……蘭……!本当に何も覚えていないの……か?」

「わかりません……」

「そ……か……」

工藤君は非常に残念そうに言う……。

「工藤君……よく聞いて……今からいうことはすごく傷つくかもしれないな

い…！」

「知ってる…蘭は…記憶喪失なんだから？」

「…そうよ…しかも…もしかしたら、もうこのまま記憶喪失のままになってしまいかも…知れないの…！」

「…！！！！！！！！」

私の言葉に工藤君は目を見開き、驚いた様子だった。

「蘭さんが元に戻る可能性は…11%…」

たった11%の確率…

いくら蘭さんだって…どうなるかわからない…！

「蘭さん…あなたの名前は毛利蘭と言って…」

「蘭…毛利蘭…」

「そう…空手を習っていたわ…。すごくカッコよくて、関東大会、東日本大会で高校二年の部に優勝したわ…！」

「東日本大会…優勝…？」

「そう…蘭さんはすごくうれしがっていたわ…」

「…本当？」

「ええ！」

「そう…」

どこか悲しげの蘭さん…そんな思い出をなくしてしまったことが…彼女を苦しめているのね…

「あなたに抱き着いた変態のこの人が、工藤新一…」

「工藤…新一…？」

ピクン

あ…蘭さんがかすかに揺れる…

「覚えがあるの!？」

「いいえ…でも…すごく暖かい感じがするの…でも…でも…何かさびしい。私…あなたの気持ちがわかる…」

「え…?何を言ってるの?」

「名前は…?」

「宮野…志保よ?」

「宮野さん…ちよつと…」

蘭さんに惹かれて、病院の隅で、蘭さんが話した。

「あなたは…その…工藤さんが好きなのね…」

「…」

「私、わかった。私は、記憶喪失になる前に、工藤さんが好きだったのね…でも…あなたたちがいたから、わたしはあきらめたのだと思うわ…それから…覚えが…」

そういつたとたん、蘭さんは倒れてしまった。

「蘭さん!!!」

私は急いで軽い彼女を抱いて病室へと連れて行った。

工藤君はもう、病室にはいなかった。

先生が蘭さんを見てくださっている。

私はその時、工藤君を探していた。不意に、夕日がきれいになる土手を見てみた。

そこには、私の愛しい彼がいた…。

「工藤君…」

私は静かに彼の横に座った。

彼はぼんやり空を見ていた…。そんな彼がかわいそうに思えた…

「工藤君…」

もう一度呼びかける…。

応答は…ない。

仕方ない…。

それなら…告白してしまおう…

これで…彼の傷を…癒してあげたい…

「工藤君、私、あなたのことが好きよ？」

「…？」

ピクン

私のほうを見る…。

「好き…あなたが好き…！この気持ちは…蘭さんより強いわ…ねえ
…工藤君…私と付き合って…そうしたら…蘭さんという傷から…抜
け出せるわ…！」

「宮野…俺…！」

第四章（後書き）

どここたえるか、新一君！！

第五章

「宮野…俺…

無理…だ…」

やっぱり…ね…

でも…やっぱり悲しいわ…。

本当に口から伝えられるのはね…

ねえ…最後だけ…最後だけ…

最後だけわがままいいかな…？

私はそつと…そつと彼にやさしく抱きついた…。

きつとあなたは驚いたことでしょう…でも…

最後のわがままだから…お願い…！

私を包んで…お願い…

「宮野…」

「お願い…っ！私を抱いて…！！私…の…最後の…最後のわがままだからあ…！！」

私は涙が止まらなかつた。

そして…彼は優しく私を抱いてくれた…。

あたたかいあなたのむね…。

大好きだったあなたの胸…。

今でも…この先も…あなたを愛しています…

私は静かに離れると、「だいすき」と耳打ちしながら家に帰って行った。

蘭さん、ごめんなさいね…私、彼をもらっわ…。

あなたには…まげやしない！！

「蘭さん…私…」

誓うわ…あなたを超えて見せる…！
あなたから…工藤君を取って見せる…

その時だった。私の考えに…何かが横ぎった…。

何…？なんだろう…！？

トゥルルルル
トゥルルルル

私は急いで受話器を取った。

「はい、阿笠または宮野です。」

「俺だ、工藤。」

「あら…どうかした？」

私…胸が熱く…

「蘭の声が聞こえたんだ…」

「え…？」

「宮野と幸せになっってくれって…」

「…？ちよつと…それって…」

「もしかしたら…蘭は自分から記憶喪失になったんじゃないか？演技してない、本当にそう思ったから…蘭は自分を捨てたんじゃないか？」

「…そうよ…蘭さんは…あなたが好きだったのよ…！大好きだったから…」

「…俺も…好きさ…蘭のこと…愛してる…」
「…！！！」

聞きたくない…！ききたくない！！

蘭さん…！蘭さんの…バカアアアアアアア

「あなたたち両想いだったのね…」

「ああ…そうみたいだな…」

うれしそうな声して…

蘭さん…私…あなたに悪いこと思ってたみたいね…。

蘭さん、確かに私は彼のこと好きよ？

でも…

私のもういいの。

蘭さん…あなたに譲るわ…。

私は…あなたたちを見守るわね…。

頑張っ…蘭さん…！

F a r e w e l l , m y f i r s t l o v e .
S n i c h i d i d n o t l o v e .

第五章（後書き）

最後のは、新一、大好きでした。

さようなら、私の初恋。

です！

最後まで、新一と呼び捨てにさせたこと、新蘭ファン、ごめんなさい！

感想お待ちしています！

第六章

蘭さんが記憶喪失になって、はや一か月が好きた。

相変わらず工藤君は蘭さんにつきつきり。

蘭さんは、工藤君と一緒にいるときだけ、笑顔を見せる。

最近渡しとしても笑顔を見るようになった。

特に、園子さんなんか、ケラケラ笑っている。

「蘭さん、最近明るくなったわね。」

「せやね！蘭ちゃん、明るくなってほんまうれしいわあ……」
和葉さんがホット胸をなでおろす。

私もなでおろしたい気持である。

「蘭ちゃん！今日、ショッピングいかへん!？」

「うん！行く！」

蘭さんは以前よりもすごく明るくなっていた。

私は、それだけでうれしかった。

蘭さん…蘭さん…蘭さん…

ああ…蘭さん…あなたはすべてを失ってしまったのね…

愛も、友情も…

「これ、いいわね…」

「蘭ちゃん、これええんと…」

和葉さんの声が止まった。

「和葉さん？」

「お、おらん…」

「え…？」

「おらんのや…蘭ちゃんがおらん！？」

「…！？」

蘭さんが…いなくなった…！？

ありえないわ…

蘭さんなら、記憶喪失になっている人間がどこかへ行ってしまっ

た…！！

連れ去られた…！？

ゆ、誘拐！？

「和葉さん！すぐに、工藤くんや、大阪の少年に連絡しましょう！」

「うん！」

二人は急いで探偵たちのもとへ走って行った。

すぐそばに老人と蘭がいるとは知らないで…

第七章

蘭は和葉と志保が行くのを見ると、老人とともに、また、どこかへ行ってしまった。

「ねえ、博士。本当？」

「そうじゃ、おぬしの記憶はすぐ戻る。」

「阿笠博士って、本当にすごいね……」

「そうか？」

「工藤さんが言ってた。博士はガラクタばかり作ってるって。でも、私はそう思いません。」

「よかった……！」

二人はこんな会話をしていた。

その後、阿笠邸で阿笠博士、「ご自慢の「記憶喪失元に戻しマシン」を蘭に見せた。

「博士、私、博士のことあんまり知らないけど、ありがとう……！」

「そんじゃ、このヘルメットを、かぶって。」

「うん……」

蘭はヘルメットをかぶると、少し悲しげな様子で博士を見つめた。

「どうした？」

「わからないの……」

「へ？」

「本当に戻っていいのか、私、記憶がある前に、何か悲しい記憶が残ってるの。すごく、切なくて、悲しくて……私、戻らないほうが、幸せなのかもしれない。」

「そうか……のう……？」

「そりゃ、工藤さんがたに、いろいろ迷惑をかけてしまうかもしれないけど、私は、そのほうが幸せだと思つた。」

蘭の言葉に博士は何も言えなかった。

「あ、ごめん博士。」

「いいんじゃない。やめても構わんぞ？」

「でも…」

「いいぞ。わしは、その日を待ってる。蘭君が決心した日を…」
博士はそういうと、蘭を毛利探偵事務所まで送っていった。

そこには、みんなが蘭を待っていた。蘭が入っていくと、和葉、園子、青子が蘭に抱き着いてきた。

「園子さん…？和葉さん？青子さん？」

「ばかぁ…どこにいたのよお！！！」

「ごめん…なさい…」

蘭はこんなに自分を待っていてくれた人がいるってことを知って泣いていた。

自分はすごく幸せだということが分かった。

「博士と一緒にいたの。」

「そっか…蘭、無断でどこか行っちゃダメじゃない…！あ、新一君たち…！！！」

そう、新一ひとりだけ、蘭を探しに行った。ほかのみんなは大気とということになったが、新一は、真っ暗の中を一生懸命探していた。

「私、行ってきます！」

蘭が突然言い出した。

「駄目よ、蘭さん！あなたは記憶喪失なのよ！？」

「でも、私が勝手なことをしたからこうなっただんです！私が探しに行きます！」

蘭はそう言い残すと、走って外に向かった。

みんな止める暇さえなかった。

蘭は一生懸命新一を探す。自分に責任を感じながら。

「よおねえちゃん…」

いきなり話しかけられた蘭は、ビクついて何も言えなかった。

「君一人？一緒に遊ばない？」

「ひ、一人ですけど…」

「なら一緒に遊ぼうぜ？」

「で、でも、人を探してるんです！」

「なら、俺と一緒に探そうぜ！？」

「わ、私一人で…」

「いいからいいから！」

蘭は男の人に、腕をつかまれ、動けない状態になっていた。どうすることもできず、怖くて目をつぶっていた蘭。その時だった。

「おい…蘭…!!」

どこからか、自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ク、工藤さん…!？」

腕をつかまれた蘭は、声を出すだけで精いっぱいだった。

「おい、蘭、何して…!」

新一は、男に気が付くと、怖い顔をして、

「あなた誰ですか？」

と聞いた。

「この子がだれか探してるんだってさ…！」

「誰だ、蘭。」

「ク、工藤さんです…！私をまだ探してるんじゃないかって…！」

「お、お前、一回帰ったのか？」

「は、はい…！」

蘭の答えにより、新一はほっとしたように、顔を赤くした。

「それより、なら、彼女、遊ぼうよ！」

「あ、でも…！」

「あん？」

男は、いきなり怖くなって、今にも蘭を殴ろうとしていた。

しかし、そばに新一がいる。

「おい蘭。家に帰るぞ？」

新一が蘭を引っ張っていく。蘭は体が動くままについていった。

つまり、男を置いて行ったということになる…

男はぽつんと一人になってしまい、どうすることもなかった。

家に帰ると、みんな蘭と新一を待っていたかのような顔をして、毛利探偵事務所はドンチャン騒ぎになった。

第七章（後書き）

今日はこれでおしまいです！
感想待っています！

第八章

「え…？新一…？」

「そう…新一って呼んで。」

いきなり告げられた。工藤さんは真剣なまなざしで私を見つめる。どうして？

どうしてそんな目をして私に言うの？

宮野さんと…付き合っているんでしょう？

私には…理解できない。

「でも、私は記憶がないんです。それに、あなたには、彼女がいるのでは？」

「いねーって。」

「なら、好きな人ぐらい…」

「…」

いきなり黙った。どうして？

どうして黙りこくってしまうの？

答えて…答えてください…

「教えてください…。私は記憶がない…だから、何も知らないんです…」

私がそう言葉を発した時、工藤さんは、うつむきながらコクンとうなづいた。

「あぁ
」

「いるん
．．．
です
ね？」

「その人は…あなたにとってかけがえのない人なのですね…なら、私は新一とは呼べません。」

私がそういうと、工藤さんは目をかっと開いた。

「そんなことない！蘭！俺は…俺は…！！！！！！」

「…工藤さん…?」

工藤さんが何か言おうとしている…
何か…ためらっている…

コンコンッ

あ…誰か来た…

「蘭さん? あら、工藤君…どうかしたの?」

宮野さんが入ってきた。

工藤さんの好きな人…宮野さん…
どうしてだろう…？

宮野さんがいると、心が苦しくなっていく…。

「蘭さん、寝ていたほうがいいわ。」

「ええ、ごめんね、工藤さん。宮野さんも。それじゃあ…。」

まるで病人。私はすぐにベッドの中へ入った。

最近、38度の熱が出る。

苦しい…私…どうなってしまうのだろうか？

私は…何も覚えていない…本当の毛利蘭は…

一度死んでしまった…。

工藤さんたちの話によると、私は通り魔によって刺され、記憶をなくしたと…。

思い出そうとすると、頭が割れるように痛い…。

宮野さん…あなたをかばったのね…私…。

宮野さんが…生きていてよかったと思っっている…

工藤さんは、とても優しい方。宮野さんが、死んだり、記憶を失ってしまつたら、すごく悲しんで、苦しむでしょうね…。

私…私でよかった…。

私は…工藤さんの心を奪いたくない…

心を失わせたくない…

そう思つたから…。。守つたんでしょうね…

記憶を失う前に…本当の私の声が聞こえた…。。

『志保さんと…新一を…幸せにして…私はもう…平気だから…あな
たは…新一から手を引くのよ…？リセットして…』

これは…私が記憶をなくした理由？

そっか…宮野さんと工藤さんの邪魔になるから…
自分から身を引いたのね…。

それで…新しい毛利蘭わたしを作ったのね…。

工藤さん…宮野さん…幸せになってください…

本当の毛利蘭わたしからのMessageです。

私を置いて…私は…リセットします…。新しい…恋を見つけてます…。
あなたたちに…初恋を置いていきます…。

きっと私は工藤さんのことが好きなんです…。
今も、前も…。

毛利蘭は

一度死に…

一度…

生き返りました…。

第八章（後書き）

なんか、間がたくさんありますね！
感想待っています！

鈴蘭

第九章

「ねえ、蘭…どうするの…?」

園子の心配そうな声が、作戦会議場となっている、工藤邸に響き渡る。その声に、一同はすつと黙ってしまふ。

今は、何も言えることはない。

「私…いやだよ?」

園子の二度目の発言で、工藤邸に集まっている、新一、志保、平次、和葉、快斗、青子がハッと上を向いた。

「何が…?」

志保の問いに園子は今にも泣きそうな顔をして

「蘭…が…死んじゃうの…」

「…そんな…」

園子は目に涙をいっばいたためて、みんなを見つめる。

「なんで、蘭ちゃんが死ななあかねん!」

和葉も涙をためて言う。蘭はみんなに好かれている。

だからこそ、みんな心配して、みんな怖がる。

「最近、蘭さんは熱を出しているわ…。病気ではないと思うの。」
「どないして、どないしてそないなと言えるん!?!」

和葉はもう怒るしかなかった。

「たぶん、心の病気よ。」

「…どういうこと？」

「蘭さんは何かのことで悩んでいるわ。もしかしたら…記憶喪失のことにつながるかもしれないけど…。」

志保の言葉に、一同は蘭が何に悩んでいるのか突き止めようと、すく一致団結した。

そこで、作戦を練る。

「蘭さんにさりげなく聞くのよ？」

「わかったで！」

特に女子は蘭のことだから、一生懸命。

ところで、新一はというと、蘭につきっきり。

「蘭…ごめんな…」

新一は、謝ることしかできない自分に腹を立てていた。

蘭はそんなことも知らずに、スヤスヤと眠っていた。

本当の蘭の瞳はもう、開けられないのだろうか？

今、記憶喪失になっている蘭が目を開けたって、前の蘭の瞳は瞳に映っていない。

一同が知っている蘭の瞳は輝いて、きらめいてみんなを吸い込んでしまっいそうなのウルウルの瞳だ。

素直で優しい本当の蘭はどこへ行ってしまったのだろうか？

一同はそう思っている…。

「なあ蘭ちゃん」

「ん？なあに？」

蘭が目を覚ますと和葉がにこにこしながら話しかけてきた。
これも作戦のうち。

「蘭ちゃん、何か悩んでるやろ？」

「え…！」

凶星を突かれたかのように蘭は驚いた。

「やっぱりなあ…」

「どうしてわかったんですか？」

「見ればわかるで。」

和葉の言葉に蘭は少しニコツとした。久しぶりに見るような顔だった。

「そんで？なに悩んでるん？」

「記憶喪失になる前なんです…」

その時、和葉はそうっと録音テープをしのばせ、録音ボタンを押した。

「本当の私が言ったんです。」

「なんて？」

「宮野さんと工藤さんを幸せにして…リセットして…」

蘭は悲しい顔をする。

「あたし…何もできへんけど…」

和葉は蘭の手を包むように握った。

「和葉…さん？」

「あたしなあ、平次のことはずっと好きやったんや…。
好きで好きで…」

「和葉さん…」

「でも、平次は鈍感やから…」

「私…どうしてもわからないことがあるんです。工藤さんは私のことを新一と呼んでくれと言います。
どうしてですか？」

「蘭ちゃん……それはな……」
和葉が……

真実を話す……

第九章（後書き）

感想待ってます。

第十話

「…それはな、工藤君は蘭ちゃんのことを好きやった…。」
「…!？」

和葉の言葉に蘭は驚きを隠せない様子だった。

「蘭ちゃんも好きやったん。2人は両想いやのに、2人して片思い
思ってたのや。そないなことみんなで見とつたら、おかしゅうてか
なわんわあ。」

思い出すような眼で和葉は天井に目を向けた。

ここは、工藤邸。

大きな部屋に立派な床。立派な天井。

どれもこれも立派すぎる。

「蘭ちゃん…あせらなくてもええ。なにか、思い当たること…いつ
てくれへんか？」

「さつきも言ったように…ももとの私が言ったんです…だから…
宮野さんは工藤さんのことが好き。
もし、私と工藤さんが付き合ったら、宮野さんの心はどこへ? 暗い
闇の中をさまよう羽目になります…。そんなの…かわいそうすぎま
す…。そして、ももとの私は、リセットしてと言いました…。リ
セットすれば、宮野さんは闇から、心は救われます。きつと、工藤
さんもそれを願っていると思います。」

蘭は悲しそうな瞳で話す。そんな蘭を見るだけで、和葉はすごく傷
ついた。

「蘭ちゃん…あたし…思うんやけど、そら、蘭ちゃんの勘違いやと思っ。」

「え…?」

「蘭ちゃん、もし、志保さんと工藤君が付き合ったら、蘭ちゃんのはどこに行っちゃった?」

「蘭ちゃんやて、闇に行っちゃったよ?」

「和葉さん…」

蘭は驚いたような、哀しいような瞳で和葉を見つめる。

「蘭ちゃん、あたしは蘭ちゃんと工藤君が結ばれてほしい。ちょい、待ってて!今、志保さん呼んでくるから!」

和葉はそう言い残すと走って志保のいるリビングに向かった。

和葉はリビングに着くと、志保の声と新一の声が耳に入った。何の話だろうと和葉はそつと耳を立ててドアに貼りついた。

『工藤君…ごめんなさいね…』

『宮野…?』

『きつと蘭さんが記憶喪失になったのは私のせいなの。』

『宮野…』

『蘭さんを苦しめていたのは私。私は工藤君のことが好き。今はもういいの。でも、そのせいで蘭さんはすごく傷ついた。蘭さんにはわかってたのよ…。私の気持ちがね…。』

『みたいだな…』

『蘭さんを幸せにしてね、工藤君。』

志保はそう言い終わるとそっと違うドアからリビングを出た。

「し、志保さん!」

和葉が出て行くこうとする志保を呼び止めた。

「和葉さん…」

「志保さん…今の話…」

「聞いていたのね…」

志保は悲しそうな顔をして和葉を見る。

和葉はどうしても許せなかった。

蘭をこんな目にあわせた志保が…。

「何でや…」

「え…?」

「何でや!蘭ちゃんの気持ち知ってたなら、なんで諦めへんかつ

た！？蘭ちゃんがどんだけ苦しむかわかってやってんの！？あたし
…志保さんのこと一生恨むで？あんたのこと殺したいぐらいにな！
和葉はそういつとその場から立ち去った。

志保は和葉の言葉により、その場に崩れ落ちた。

自分はなんてことしてしまったんだろう…？

一度は蘭さんを見下していた…。
一度は蘭さんを恨んでいた…。
一度は蘭さんを憎んでいた…。
一度は蘭さんを睨んでいた…。
一度は蘭さんを無視していた…。

こんな罪びとが…

許されるはずがない・・・

ゴメンナサイ・・・ゴメンナサイ・・・

謝っても謝っても謝りきれないこの言葉・・・。

蘭さん？...蘭さん？...

だから…元の蘭さんに戻って…っ

私たちの…

本当の蘭さんに戻ってください…っ

蘭さん…っ

第十話（後書き）

ちよっと志保ちゃんがかawaiiそんな場面です。
感想等お待ちしています！

第十一章

許さへん…

許さへん…

思ってもみなかった…

蘭ちゃんの友達言ってる志保さん…

志保さんのせいで蘭ちゃんの記憶が失われる…

ありえへん…そう思ってた…なのにや…？

なのに。

信用しとった志保さんのせいで蘭ちゃんを地獄へ送ったんや…

あたしは怖い顔をして、蘭ちゃんが待つ部屋へ向かっていた。
確かに工藤邸は広い。

でも、今のあたしにはそないなことどーでもよかった。

ただ、志保さんを許すことができてめっちゃ怒ってた…

途中、あたしの大好きな平次に会った。

平次はニカツと白い歯を見せて、あたしに話しかけた。

「おう、和葉。何怖い顔してんねん。」

「あなたには関係あらへんわ！」

平次は悪くない…

なのに、いらいらしとるあたしは口が勝手に動いとった。

「何やねん。人がせつかく心配しとるちゅーのに…」

心配…しとった…？

ほんまに…？

「平次…すまへん。あたしちよつとイライラしててな…」

「和葉…？」

平次はやさしゆうてかなわん。

いつもはあたしをからかうのに、こついうときだけ優しいんや…。

ずるいで…？

「そんでな、蘭ちゃんが記憶喪失になったんは、志保さんのせいやて…。」

「そか…」

「そんだけ？」

「せやなあ…しゃあないやんけ。」

「はあ？」

平次は…

あの宮野志保あんなに味方するん？

「こつなつてしもたんは宮野つちゅー姉ちゃんのせいかもしれへんけど…それはそれでしゃあないことやんけ。」

「平次…！あんだ…志保さんのこと…」

「あん？」

「好きなん？」

「ほへ？」

平次…おかしい…

あんなに志保さんの味方するなんて…

ありえへん…ありえへんよ…

「さあな…」

「…!!!??」

あたしはその場から消えたかった。

むしろ、蘭ちゃんと同様、記憶喪失になりとって、しゃあなかった。

あたしは、重い足を一生懸命動かして、工藤邸から走って出た。

蘭ちゃんには悪い思ってる。

ごめんな…行けなくてな…

蘭ちゃん…もう一人やないで？

あたしも…あたしも…記憶喪失になったる…

生きていたらな…

あたしはそう思い、真っ青な空を見上げて目を閉じ、大きな高いビルの下を向いてそっと前に体を倒した。

そう、それは、スローモーション。

自殺するような女子。

それを止められることのできない、クラスメイトや友達。

蘭ちゃん…

平次…

ひょうしやなごじぶ…

あなたのせいやけど…大好きやったで？

志保さん…

一生恨んだる…

工藤君：

蘭ちゃんと幸せになりい…？

サヨナラ…

みんな…

第十一章（後書き）

和葉が…和葉が自殺?!

どうなる?和葉あ!

一応、蘭のせいでこうなったと皆さん思われると思いますが、そんなつもりで書いているわけではありませんので、蘭を見捨てないでくださいね〜(<―>)

感想待ってます!

第十二章

ドサツ！！！

大きな音がビルのそばに響き渡る。

ポニーテールをした少女が目を閉じて頭から血を流して倒れていた。

「キヤアアアアアアアアアア！！！！！！」

町にひきわたるこの悲鳴。

周りの人は急いで救急車やら、警察を呼んだ。

新一と平次は当然のごとく、目暮警部に呼ばれていた。

2人が現場に到着すると、警部が困ったような悲しい顔をして少女の乗せられた救急車を見送っていた。

「警部？どうかしたんですか？」

「あ…いやね…たぶん、飛び降り自殺だと思っただが…その、自殺しようとした少女がね、彼女なんだよ…」

「彼女？」

「誰や？」

新一と平次は嫌な予感がした。

特に平次は大切なもの、大切な宝物が壊れてしまいそうな嫌な予感がした。

「この子だ…」

警部が自殺した時の写真を二人に見せた。

写真の中からすると、とても高いところから飛び降りたのか、血がたたくさん飛び散っていて、頭から泊まる様子もないぐらい血が出ていた。

それよりも、2人がとても気になったのは、自殺した少女だった。

黒髪のポニーテールをした髪の毛に、白い肌、それはまぎれもなく、
遠山和葉だった。

「か…和葉…？」

平次は驚きを隠せない様子でしゃべる。

新一も驚きでいっぱいだった。

「警部ハン…和葉は…どこの病院行った…？」

「へ…？」

「どこ行ったかきいてんねん…!!」

怒鳴る平次に警部は

「べ、米花総合病院…」

「そか…!!」

平次はタクシーを使わずにはしって病院へと向かった。新一はタクシーを使っていったが…

平次が病院に着いた時には、蘭、志保、青子、快斗、新一が手術室前に立っていたり、座っていたりしていた。

「遅かったじゃない」

平次が来たのを志保が見つけると、冷たい声で言った。

「ハアハア…ハアハア…か、和葉は？」

「このとおりよ。」

志保が手術室を見なさいとでも言うようにその場から一步下がった。

「そか…」

平次は悲しそうな、残念そうな顔をしてうつむいた。

「服部さん…?」

蘭は平次に近づいた。

「おお…探偵事務所の姉ちゃん…」

「和葉さん…はきつと大丈夫です…」

「…姉ちゃん…」

「私…和葉さんにたくさんのこと教えてもらいました…。優しい方です…そんな人が死ぬはずありません…。」

蘭はやさしい声で平次に言う。

新一も、快斗も青子も志保も穏やかな顔で二人を見ていた。

パツ…

急に手術中というランプが消えた。

一同はハツとして手術室を見上げる。

中から、緑色のエプロンみたいなものを着た人が、一同に笑顔で話しかける。

「大丈夫ですよ、手術は成功しました。」

「やった…！」

「きゃあー！」

「おっし！」

「ほ、ほんまか…？」

「よかった…！」

一同は感動であふれていた。

しかし、

次の言葉により、感動の色は一気になくなる…。

「しかし…」

遠山さんは…

「記憶喪失になっている可能性があります…。」

キオクソウシツニナツ
テイルノガ・・・

フタリニナッタ・・・

第十二章（後書き）

とうとうなってしまいました、和葉ちゃん！
感想待っています！

第十三章

遠山和葉と書かれた病室に和葉は眠っていた。

和葉のいる病室前には平次、快斗、青子、蘭、新一が立っていた。

どう、入っていいのかわからなかった。

たしかに、蘭が記憶喪失になっているから、扱いはなれているつもりだったが、和葉の場合はわからない。

「蘭さん？」

蘭は足も、手もすべてが震えていた。

それに、一同は気がついて、すごく心配している。

「あ…いや…何でもありません…。ただ…私が…行けない…よう…
な…気が…して…」

蘭の言葉がとぎれとぎれになっていく。

「蘭ちゃん！」

「蘭さん！！！！」

「らん！！！！！！」

その瞬間、蘭はドタツと音を立てながらその場に崩れるように倒れた。

「和葉……ちゃん……」

最後につぶやいた言葉は本当の、元の蘭の口調だった。

「蘭！蘭っ！…！蘭、おい、しっかりしろ！蘭！…！！…！！…！！」

その時、蘭の意識はなくなった。
蘭は長い夢のような道をどっている…

「……は……ど……？」

蘭は暗い道を少しずつまっすぐに進んでいた。

「あなたは……誰？」

まっすぐ進んでいると、そこにいたのは、蘭そっくりな少女がいた。

「誰……？」

「私の名前は……毛利蘭。」

「私と同じ…」

「そう、あなたとおんなじ。あなたの目の前にいる私はあなたの分身でもなんでもないわ…。」
蘭が2人いるのである…。

ちなみに、まっすぐに進んでいた、記憶喪失の蘭はおろしているが、今であった、そっくりな子が一応、ポニーテールに縛っているのである。

「あなたは誰ですか・・・？私とそっくりよ？」

「あなたは、あなたじゃない…。あなたは私なの…。」

「え…？」

「あなたと私は…同一人物。つまり、毛利蘭は一人しかいないわ…。」

「静かに話すポニーテールの蘭はどこか、優しい元の蘭にしか思えない…。」

「あなたが…記憶喪失の私ね…。」

「え…？ならあなたは…」

「そう、もともとの私。ほらね…」

元の蘭は縛っていた髪を下ろし、本当の姿で記憶喪失になった蘭を見つめた。

「あなたが…私…？私は…あなた…」

「そうよ…新一…どうしてる？」

「新一…」

「園子も…服部君も…和葉ちゃんも…快斗君も…青子ちゃんも…」

「園子…服部君…海斗君…青子ちゃん…
…
…
…
和葉…ちゃん…？」

和葉という言葉で蘭は肩を震わせる。

「どうしたの？」

「和葉ちゃんが…記憶喪失になったの！」

「!!!!!!」

「私のせい…私のせい…なの…私が…記憶喪失だから…!!」

「…あなたは逃げてる…。」

「え…?」

「そうやって、自分のせい、自分のせいって言うてるだけで、何もしてないじゃない!私あなた、あなたは私!だから…お願い…自分の力で自分の持っているもので…」

記憶を取り戻して!!」

「姉ちゃん！」
「蘭ちゃん！」

「蘭ちゃん……！」

新一、園子、志保、青子、平次、快斗…そして…和葉の順で蘭を呼ぶ声が聞こえてくる…。

「自分の力で自分の持っているもので…」

記憶を取り戻して…!!」

私の…本当の私…

蘭は少しずつ目を開けた。

その瞳はどこか懐かしい瞳だった。

「蘭！」

一番最初に新一が蘭の名前を呼んだ。

「蘭……！」

次に園子、そして、志保、青子、平次、快斗と順に蘭の名前を呼ぶのだ。

「し……」

新
—
…
L

第十三章（後書き）

き、記憶を取り戻した！？
感想待ってます！

第十四章

「し…新一…」

「蘭…？」

「蘭が…」

「記憶を…」

「取り戻した…」

「私…なんだか長い夢を見ていたみたい…」

蘭が静かにみんなを見ながらゆっくりと話した。
みんなは驚きでいっぱいだった。

「蘭…記憶は…」

「記憶喪失になってたんでしょう？私。」

「ああ。」

「記憶喪失だった私に、元の私がこう言ったの。『自分の力で記憶を取り戻して』って。」

「蘭…」

「だから私、新一や、みんなに会いたくて…会いたくて仕方なかった。だから…一生懸命頑張った…」

蘭の言葉で一同はよかったとでも言うつように安心した顔になった。
蘭は笑顔でみんなを見つめた。

「そだ、和葉ちゃんなんだけど…」

園子が話を切り出す。

その途端、雰囲気が暗くなる。

蘭はそれを見て、あの夢は本当だったんだと確信した。

「やっぱり…そうだったのね…」

「蘭…」

「記憶喪失…になったんだってね、和葉ちゃん。」

「そうよ。私のせいだね。」

「志保さん…？」

志保は悲しそうな笑みを浮かべて蘭に事情を話した。

「志保さんのせいじゃないわ…。」

「蘭…さん…？」

「そんなの、志保さんのせいじゃない！今は今。私、ちょっと和葉ちゃんにあってくる！」

蘭はそう言うなり、走って和葉の病室へ向かった。

蘭は思い切りドアを開けると、そこには起き上がっていた和葉が窓を見ていた。

それはまるで絵のような美しさ。

遠くのほうを見つめる少女。そのそばにいる少女が哀しそうに少女を見つめる。

ああ、何という気持であったらうか、この二人は…

「和葉ちゃん？」

蘭の言葉に、和葉はさっとふりむいた。

「あなたは…誰や？」

「あなたの名前は遠山和葉ちゃん…。」

「そか。」

「そう、そうやって逃げてる…。」

蘭から眼をそらす和葉に蘭はやさしい声で言った。

「なんやて？」

「あなたは、きっと私のために飛び降りたのね。でも、私はそんなことしてほしくなかった。」

「何言ってるねん。」

「私も、あなたと同じ記憶喪失になったからよ。」

「・・・!？」

蘭の言葉には和葉は息をのんだ。

「和葉ちゃん、自分の力で…記憶を取り戻してごらん?自分の力でやってみてよ。私もそうして…記憶を取り戻したから…。」

蘭はそういうと、病室からそっと出て行った。

「自分の力で…」

和葉は蘭が言った言葉をずっと繰り返しつぶやいていた。

第十四章（後書き）

感想待っています。

第十五話

「か、和葉…」

平次が和葉のいる病室に入ると、和葉は蘭が来た時と同じように、窓の外を見ていた。

「和葉…」

「あんたは誰？今度は何の用や。」

「今度？前に誰かきよったんか？」

「せやで。黒髪でロングヘアで優しい目えしとったわ。」

「…姉ちゃんか…。」

「あんたと知り合い？」

「ああ、そや。」

「彼女？」

「なっ！！！」

「ふうん…。」

和葉は怪しそうに平次を見つめた。

どこか…

悲しい…。

どっか…

モヤモヤする…。

「ほんで、その姉ちゃんはどこ行きよった？」

「名前はなんて言うん？」

「毛利蘭や。」

平次の言葉に和葉はベッドから起き上がると、平時に抱き着いた。

「な、なにすんねん！」

平次はいきなりのことだったので、どうすることもできなかった。
ちょうどその時、蘭が和葉の病室に訪れた。

「和葉ちゃん！入るよ…！！！！！！」

蘭がドアを開けた時、平時と和葉が抱き合っていたのだ。

「あ…！！！！」

「姉ちゃん……すまん……」

「い、いいのよ…別に…。それで…和葉ちゃんは…?」

蘭が和葉のほづを向くと、和葉はあんたよりあたしのほづがうえや
で?とでもいったそうににらんだ。

「あたしのはかまわんとして?それで、毛利さんとか言つてた
な…。」

「え、ええ……」

「ちよいと来て。」

和葉は無理やり蘭を連れて、女子トイレへと向かった。

女子トイレの個室で和葉は蘭を問い詰める。

「ほんで?あの色黒さんとはどういう関係や?」

「え…?」

「まさか…ほんまに恋人同士なん!?!」

「え!?!」

「…あんた…ただじゃおかんで!?!」

「どうして?」

「はあ?」

「あたしは、服部君のことは好きじゃないよ?ていうか、和葉ちゃ
ん。好きなの?」

「ハッ……」

「和葉ちゃん……もしかして……もう、記憶を取り戻したんじゃない？」
「……」

和葉は凶星を突かれたように顔を青くした。

「服部君に近づきたくてわざとそうしていたんじゃない？まあ、私が来た時は本当になっていたんだと思う……。どうなの？」

「……さすがや、蘭ちゃん。さすが、工藤君の彼女やね。」

「和葉ちゃん……！というか、私は新一の彼女じゃないし……」

蘭は元の口調の和葉にうれしさを言葉に出していた。

「蘭ちゃん、ほんまに平次のこと好き？」

「え？」

「好きやったら、あたしかなわんよ。」

「和葉ちゃん、あたしは服部君のこと、好きじゃないよ？和葉ちゃんも積極的になったよね？」

「う、うん……」

和葉は顔を真っ赤にしてうつむいた。

そんな和葉の腕をつかみ、蘭がトイレから出して、和葉の病室に戻っていった。

その途中、和葉が蘭にお礼をいきなり言った。

「ありがと…。」

「和葉ちゃん？」

「あたし、蘭ちゃんのおかげで記憶を取り戻したわ…。なんかな、自分の力でっていう言葉をずっと繰り返してたら頭がいとうなってきた気絶してて、気が付いたらあたし、なにしてたんやろみたいなことになってもうてん。多分、蘭ちゃんのおかげや！」

和葉はそういうなり、走って病室へと向かった。

蘭はよかったとつぶやくとゆくり歩いて新一のもとへと向かった。

「ねえ新一。」

「お、蘭！」

新一は蘭に話しかけられたということからうれしそうに言った。

和葉ちゃん、記憶を取り戻したよ？と新一の伝えると新一は嬉しそうによかったといった。その様子に蘭はすこし胸が痛んだ。

新一は和葉ちゃんが好きなのかな…？ -

「新一、私、ちょっと出かけてくる。」
蘭はうつむきながらそう言っただけで病院を出た。

新一は止める暇もなくその様子をただじっと見ているだけだった。

「工藤君…あなた、どっちが好きなのよ?」

いきなり志保が新一の目の間に現れた。

「宮野…」

「和葉さんのこと心配して。蘭さんのことはどうでもいいの?」

「はあ?」

「蘭さんは傷ついたわよ?あなたが和葉さんの心配をするから…。」

「そりゃ、心配するだろ?」

「あなたって本当に鈍感ね。」

「ンだよ…」

新一はふてくされたようにブスツとした顔になった。

志保はそれを見てクスツと笑うと、そのバカさって言った。

新一は…

和葉ちゃんが好き…

私は…新一が好き…

和葉ちゃんは・・・服部君が好き…

服部君も和葉ちゃんが好き…。

私の心は…新一の心はどこへ行くの…？

私は…新一を奪うことはできない…。

記憶喪失のままがよかったような気がする…。

新一…あなたのことが…大好きです…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2121z/>

花開くとき

2011年12月17日10時53分発行